



CONTENTS

世界に羽ばたく小さな存在

大澤 健 司

宮崎大学国際連携機構国際連携センターの最近

村 上 啓 介

Bangladesh から宮崎へ

サルダール シナ

ー Bangladesh と日本の架け橋になることを目指してー



世界に羽ばたく小さな存在

宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会会長

宮崎大学農学部

大澤 健 司

今年4月に乗峰潤三先生から連絡会の会長を引き継ぎました。私は当会への入会から年数が経過しておらず、本来であれば長年当会の幹事や事務局を務めてこられた佐伯雄一先生（宮崎大学農学部）が適任なのでしょうが、「今回は年齢順に」との佐伯先生からのご提案もあり、小生が務めさせていただくこととなりました。

まずは挨拶を兼ねて私の JICA との関わりを述べます。最初は青年海外協力隊です。私は小学校を卒業する頃までには海外に対する関心を強く持っていました。きっかけは、小学4年生の頃に見た、ある本の写真を見た時の衝撃です。それは、痩せ細ってお尻の肉がほとんどない幼児が地べたに座り込んでいる、アフリカでの一光景でした。6年の終わり、卒業文集の表紙は各児童が自分でデザインした絵を自分用の文集に使ったのですが、私はそこに世界地

図を描き、その真ん中に「世界に羽ばたく小さな存在」と大きな文字で書きました。中学生になり、ふと目に留まった新聞広告（それは全2段か3段の小さな広告でしたが）にあった「青年海外協力隊」という文字に釘付けになりました。高校1年の頃、ふと母がもらした「友達の息子さんが獣医を目指しているらしい」という言葉を聞いて、「獣医？そうか、獣医師になれば海外協力に活かせるかも」と考えました。私には海外協力をしたいという思いが先にあり、獣医はその手段でした。大学入学時、「今後6年間で海外協力隊よりも心揺さぶられる進路がない限りは協力隊を目指す。」との思いは結局大学最終年度になっても変わらず、6月に出願、8月14日の誕生日に合格通知を受け取りました。当時は郵便での連絡でしたが、8月前半は農業共済組合の家畜診療所での実習だったために自分のアパートを不在に

して、実習から帰ってきたら郵便受けに通知が入っていたのです。飛び上がるほど嬉しかったことを今でも憶えています。

協力隊も技術移転ですから、その技術を移転する“指導者”には相応の技術力が必要とされ、そのためには相応の実務経験があることが望ましいとは言うまでもありません。私も実務経験をせめて2、3年でも積んでから派遣された方が現地の人々のためになるのではないだろうか、学生あがりがいきなり海外に行っても何の役にも立たないのではないか、という思いもありました。しかし、青年海外協力隊の、特に獣医など資格が必要な分野の中には実務経験を問わない要請もありました。また、一回就職すると職場のしがらみに負けて退職する勇気（言う気）が出なくなるのではないか、日々の生活に流されてしまうのではないか、という漠然とした不安もありました。自分に自信がなかったのでしょうか。あるいは、単にその時に自分がやりたいことしか頭になかったのでしょうか。

ということで、1989年4月から国内とメキシコでの訓練を経て同年9月に南米パラグアイの地方都市に派遣され、1991年10月まで協力隊員として活動しました。派遣先の職場はアスンシオン大学コンセプション分校で、教育機関だったので学生相手の実習と、エクステンション活動として地域農家を巡回して人工授精の普及に励みました。もちろん、反省点は多々あるものの、実務経験が無くとも自分なりにベストを尽くした結果、現地の人々に多少なりとも喜んでもらえる活動ができました。今思い返してみれば、やはり「思い立ったが吉日」なのだと思います。“タイミング”と“勢い”は人生のターニングポイントにおいては重要な要素です。

次の関わりは、1995年から2年間、JICAの長期海外派遣研修制度で留学の機会を得たことです。当

時は年間30名足らずの募集人数の中のほとんどは各種省庁の若手官僚で占められ、残りは若干名として「協力隊員OV枠」がありました。私はその枠でこの制度を利用して英国に2年間留学することができました。帰国するタイミングで岩手大学農学部私の専門分野（臨床繁殖学）での助手の公募があったのでそれに応募した結果、1998年4月から採用されました。2000年秋に、所属研究室の教授のかつての同僚がリーダーを務めていた技術協力プロジェクトにおいて繁殖学の専門家を探しているという話が持ち上がりました。教授も私の海外志向をよく知っていたので、「大澤君、行ってみる？」との誘いに対して二つ返事で「はい！」でした。そして南米ウルグアイ・モンテビデオでの「獣医研究所強化計画プロジェクト」にて1年間、専門家を務めました。帰国後は岩手県JICA帰国専門家連絡会に入会し、間もなく事務局を務めることになりました。いつも活動がある訳ではなかったですが、各種活動の準備や会計、他団体との連絡など、こまごまとした、しかし、こなさなければいけない用件も多く、意外に大変な作業でした（本会の事務局も同様でしょう）。その後も、2005年にベトナム・ハノイでの「牛人工授精技術向上計画プロジェクト」にて約1ヶ月間、短期専門家を務めました。2012年4月に宮崎大学に移ってからはJICA専門家として派遣される機会はありませんが、数年前より海外協力隊の技術専門委員を務めており、訓練中の隊員候補生に対する講義などを担当しています。

ということで、気が付けばJICAとは長い付き合いになりましたが、JICA以外にも様々な形で国際協力に携わっています。前々会長の山口先生から紹介されたハノイ農業大学（現：ベトナム国家農業大学）の若手教員を大学院生として受け入れた後、彼が帰国後に世界銀行から採択されたプロジェクトの

関係で私をベトナムに呼んでくれたこともありました。また、今年1月には韓国のソウル大学やインドネシアのボゴール農科大学の大学教授と共にカンボジアの王立農業大学の獣医学生に対して特別講義と実習プログラム（写真）を実施しました1）。

ここ数年の世界はコロナ禍、アフガニスタンでの政変、ウクライナ戦争、そして昨今のパレスチナ情勢の緊迫化と、混沌の度を深めています。かつて冷戦時代に終止符が打たれた時、世界中が平和な時代が到来するかと思いきや、それは妄想だったと気付かされます。しかし、だからと言ってただ無力感に

打ちひしがれているだけではいけません。極東の島国に住んでいようと、彼の地で苦しんでいる人々に思いを馳せ、自分にできることを考えるべきです。一人一人の存在は小さくとも、世界平和につながる活動を日本でも地道に積み重ねれば、その成果はやがて世界に羽ばたき、届くはずだと信じています。

宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会としても派手な活動はできませんが、県内の関係諸機関とも連携を取りながら地域における国際理解を進め、私達ができる国際協力をコツコツと積み重ねていきたい考えです。どうぞよろしく願いいたします。

参考文献

- 1) 大澤健司, 直井昌之, 木村順平. カンボジア王立農業大学獣医学部での国際チームによる教育支援活動. 日本獣医師会雑誌 76: 453 ~ 456 (2023)

外国人卒業生（アフガニスタン等）の人道支援に係る寄附のお願い →



写真:王立農業大学（プノンペン,カンボジア）で実施したキャパシティ・ビルディング・ワークショップの一コマ。繁殖学実習で牛の子宮疾患を診断するための各種検査や材料採取の方法について、王立農業大学の教員が学生に対して説明している（2023年2月7日）。



宮崎大学国際連携機構国際連携センターの最近

村上 啓介

宮崎大学国際連携機構国際連携センターでは多様な業務を行っている。教育と研究は大学の主要な2本柱であるが、これに加えて国際連携や地域連携にかかわる活動が大学にも強く求められる時代となり、当センターにおいても活発な活動を行っている。

当センターの教育に関わる活動としては、日本人学生の海外派遣プログラムの企画と運用、留学生の受け入れと就学サポートが主な業務となっている。コロナ禍はオンライン留学プログラムの充実を促し、例えば米国国務省支援による集中オンライン英語プログラムは学生に人気のあるプログラムに成長した。同プログラムを受講したい学生は高い倍率をかいくぐる必要があり、学生への教育効果は相応に高い。

加えて、令和5年度には大学の世界展開力強化事業に採択された。本事業は、宮崎大学を基幹校に南九州大学、宮崎国際大学、宮崎学園短期大学と連携してグローバルな学生交流に取り組むものである。事業期間は5年間で、米国のIUP（ペンシルベニア州立インディアナ大学）を中心に、韓国、台湾を加えた海外大学と学生交流を活発化する予定である。

ここでは、COIL型教育を取り入れた学習を取り入れるとともに、メタバースを活用した語学学習や学生交流の活発化を図る予定であり、今後の展開が期待される。

国際連携センターにおける研究として、地下水ヒ素汚染問題への取り組みの歴史は古い。バングラデッシュやインド、ミャンマーなどをフィールドにJICA事業や科学研究事業費による事業を通じて調査研究を進めてきた。その結果は多くの論文に取りまとめられるとともに、研究者間の人的ネットワークの形成に大きく貢献している。これら有形無形の資産を活用した研究面での国際連携の更なる強化が期待される。

国際化を中心とした地域連携にかかわる活動としては、B-JET(Bangladesh-Japan ICT Engineers' Training Program) や B-MEET(Bangladesh-Miyazaki ICT Engineers' Educational Training) として宮崎大学履修証明プログラム「宮崎大学420単位時間日本語教員養成プログラム」の展開が挙げられる。B-JET（「外国人ICT技術者人材育成プログラム」）はご存知の通りバングラデッシュの優秀

な ICT 技術者を日本に招き入れて定着を図るもので JICA 事業として始まった。2021 年から JICA 事業を承継して宮崎大学履修証明プログラム「外国人 ICT 技術者人材育成プログラム (B-JET Basic Course / Advanced Course)」を立ち上げ、株式会社新興出版社啓林館の寄付講座として運用している。2023 年 10 月時点で 13 バッチまで終了しており、日本全国で 186 人が活躍するまでに成長した(2022 年 5 月現在)。本事業ではバングラデッシュノースサウス大学に多大なるご協力を頂いている。特に、同大学のキャンパス内に B-JET センターを設けて頂き、B-JET 生の教育に活用している。

また、2022 年度より JICA の草の根技術協力事業の地域活性化特別枠を活用した、「宮崎-バングラデッシュ ICT 人材育成事業 (B-MEET)」の運用を開始した。本事業は宮崎市を提案団体、宮崎大学を実施団体とし、宮崎市 ICT 企業連絡協議会の協力を得、バングラデッシュ側の企業団体とノースサウス大学をカウンターパートとしたプログラムである。バングラデッシュの IT 人材を対象に日本語やビジネスマナー等の研修プログラムを行いつつ、バングラデッシュ側の企業団体と宮崎の企業との結びつきを支援し、バングラデッシュと宮崎の経済交流を促進することを目的としている。このような事業を通じて地域経済の活性化が促進されることに大きな期

待を持っている。

宮崎県内で就労する外国人は右肩上がりが増えており、この傾向は今後も続くものと思われる。このような状況を鑑みると、異文化理解や多文化共生社会の構築が急がれ、その基盤となる円滑なコミュニケーションを担保する仕組みは不可欠である。具体的には、日本語を介してコミュニケーションができる環境の整備が急がれる。一方で、宮崎県内では外国人に対する日本語教育を担当できる人材は少なく、その人材養成は喫緊の課題となっている。宮崎大学では、2018 年から「宮崎大学 420 単位時間日本語教員養成プログラム」(現在は履修証明プログラム)の運用を開始し、2023 年度には第 5 期を実施する運びとなった。今後は、これまで養成した 80 名を超える人材が、日本語教育のみならず地域の多文化共生に大きく貢献することが期待される。



Bangladeshから宮崎へ ー Bangladeshと 日本の架け橋になることを目指してー

宮崎大学国際連携センター 特別助教
サルダール シナ

Bangladeshには未だにアジアの最貧国というイメージがつきまとっているが、実際には2026年に中所得国となる見込みである程の経済発展を遂げている。それ故、ICT化についても遅れているのでは、と考えている方が多いかもしれない。しかし実際は、国を挙げて「デジタル・ Bangladesh」政策を推進しており、その成果は着実に経営成長と結び付きながら様々な分野においてICT化が進められている。2017年以降、JICAの技術協力プロジェクトの一環として、宮崎は「外国人ICT技術者人材育成プログラム」（以下、B-JET）をつうじて BangladeshのICT人材を受け入れており、これまでに50名以上が宮崎県内で活躍している。

私が高校生だった2011年、我が母国である Bangladeshでは飲用水である地下水のヒ素汚染が社会問題化しており、その問題解決の為に活動していたJICA専門家の日本人男性と出会った。この男性こそ、宮崎発のNPO、「アジアヒ素ネットワーク（以下、AAN）」の代表を務める川原氏であった。

もともとYWCA¹をつうじて、環境問題に関する取り組みに関わっていた私は、AANの招待で2015年に高千穂町で行われた環境フォーラムに参加した。その際、たくさんの優しい日本人と出会ったことで、「この国のことをもっと深く知りたい」と思うようになった。

大学卒業後の2017年、川原氏の助言のもと、宮崎市の専門学校に入学し、たった1年間で日本語能力試験「N2」に合格したことで、最優秀学生として表彰を受けた。その表彰状には「今後は母国と日本の架け橋として活躍されることを期待します」と激励の言葉が記されていた。このことが自信となり、日本語教師を目指すようになった。日本語学校での功績が評価された結果、B-JETの補助教員としてアドバンス日本語授業を教えることになった。さらに、宮崎大学で「420時間日本語教員養成講座」を修了し、21年に同大学の特別助教となった。

この仕事をつうじて、 Bangladeshから日本に働きに来るIT技術者に日本語や生活ルール、ビジネス日本語などを教えることで、母国と日本の懸け

¹) Young Women's Christian Association: キリスト教の基盤に立ち、青少年と女性にフォーカスし、人権・健康・環境が守られる平和な世界を実現することを目的に、世界の仲間とともに活動している国際的な組織。

橋を育て、それぞれの国の発展に貢献したいと思うようになった。

2022年4月からは、JICA 草の根技術協力事業として、B-MEET（バングラデシュ国宮崎ーバングラデシュ ICT 人材育成事業）が始まった。同事業の目標は双方の経済交流を促進体制が整備されることであり、事業の対象者は日本語を初めて勉強する入門レベルの人や、日本もしくは日本文化に興味を持っているバングラデシュ人である。特に、民間企業のニーズに合った日本語学習カリキュラムを作成し、バングラデシュ側 ICT 人材への日本語・日

本文化・ビジネスマナー等の研修を行っている。この事業において、私はベンガル語母語話者の日本語教師として、生徒のニーズに対応した教材を開発した。さらに、日本語の文字表記、日本文化、日本とバングラデシュの歴史や身近なトピックを扱う動画の視聴やディスカッション、実際の体験を通して文化の違いを理解する機会を提供することでより楽しい授業を実施している。その結果、両国の企業や人材のためにビジネス・マッチングの機会を提供できつつある。

将来は現在の業務を継続しながら、私のように両国の架け橋となれる人材を育成していきたい。



写真①：大学生向けの日本語クラスの風景



写真②：経営者向けの日本語クラス・日本 - バングラデシュ友好ソング

編集後記

JICA エキスパート宮崎第 26 号をお届けさせていただきます。今回は、宮崎大学国際連携機構国際連携センターの村上啓介センター長に寄稿をいただきました。また、同センターの特別助教のサルダール・シナ先生にも寄稿いただきました。

2023 年度から、宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会の会長は、宮崎大学農学部の乗峰潤三教授から、大澤健司教授へと引き継がれています。新会長の挨拶も掲載しております。

私達の身の回りでも国際化が進む中、県民の皆様に広く JICA の活動を知っていただき、国際協力の展開・支援を進めていきたいと考えています。宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会は宮崎県海外協力協会と宮崎県青年海外協力隊を支援する会と協力して合同総会を開催しております。会員の皆様の参加を心よりお待ちしております。本連絡会の活動について皆様のご提案、ご意見をお寄せください。ご連絡は下記までお願いいたします。

会長 大澤健司 osawa@cc.miyazaki-u.ac.jp
 幹事 佐伯雄一 yt-saeki@cc.miyazaki-u.ac.jp
 河野 久 kawano.hisashi@of.miyazaki-u.ac.jp
 井上果子 kako.inoue@cc.miyazaki-u.ac.jp
 福林良典 fukubayashi@cc.miyazaki-u.ac.jp

事務局：〒 889-2192 宮崎市学園木花台西 1-1 宮崎大学工学部内
 編集責任：福林良典